

担架ボートPUKA 開発のキツカケ

東日本大震災を綴った菅野武医師の著書

『寄り添い支える』

公立志津川病院 若き内科医の3・11

水没した階でも生存者が!!
エアマットで浮いて助かった!!

「誰かいますか」

「返事をしてください」

祈るように叫びながら少しずつ進んで行った。

ついさっきまで使っていたナースステーションには、泥と壊れたベッドが流れ込み、病室の奥の窓に目を向けると、体の一部だけになって引っ掛かっている人がいた。別の部屋では倒れた棚の下敷きになっている人も目に飛び込んできた。かつてみたこともない地獄の光景がそこにあった。

そのとき、「先生、ここに息のある方がいます」。一緒に四階へ下りてきた看護師が涙目で叫んだ。駆け寄ると窓が割れ扉もひしゃげた病室の中に、泥水をかぶりながらも生きている人が見つかった。天井近くまで濁流の跡が壁にある。自分で逃げられない高齢者がどうやって助かったのだろうか。寝たきり患者の褥瘡予防用ベットのエアーマットもあるのです、もしかすると空気の入ったベッドマットごと浮き上がって一命を取り止めたのだろうか。とにかく生きています。絡まる点滴の管をきり導尿管も途中から切って患者を引っ張り出し、「よく頑張ったね」と声を掛けて抱きかかえた。目の前の命をこれ以上失いたくない気持ちで必死だった。

(著書より一部抜粋)

自力で避難できない入院患者や要介護高齢者、障がい者を救うため
浮いて逃げる、**垂直避難**という発想が生まれた。



2011年3月11日の
東日本大震災の津波で
壊滅的な被害にあった
南三陸町の志津川病院の
内科医の証言

発行：2011年12月30日
発行所：河北新報出版センター